

令和6年度 学校経営計画書

1 教育目標

- 心身一如の発達につとめて
- 真理を求め、勉学を第一義とすること
- 情操を豊かにし、自らの品位を高め、他者の人格を重んずること
- 正義を愛し、誠実にして、社会から信頼されること

石川県立金沢泉丘高等学校（全日制課程）

校長 岡橋勇侍

2 中・長期的目標

本校教職員からなる「チーム泉丘」は、変化の激しい社会における答えのない様々な課題に協働して立ち向かう実行力、本当にこれでよいのかと様々な角度から探究心を持って思考し、自分の考え・想いを語る力を積み重ね、ひいては一人ひとりの夢、目標に向かい自走する力を、生徒に育成する。この実行により、社会に貢献するリーダー、他者を思いやることのできる人材を輩出する学校、全国一の魅力ある公立高校になる。

（1）学校の現状

- ① 本校は、創設以来「心身一如」を校是とし、調和のとれた人材育成に取り組んでいる。「確かな学力」を身につけさせるとともに、次世代を担う心身共に健全で品位と良識あふれるリーダーの育成をめざし、保護者や県民から信頼される学校づくりを進めている。
- ② 大学進学に関して、県内有数の進学校としての実績を収めている。世界を視野に高い志を掲げて学習させるとともに、第一志望を実現させることをめざしている。
- ③ 平成15年度から令和2年度まで、4期18年間SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）研究開発の指定を受け、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成に努めてきた。令和4年度から5年間、SSH認定校に指定され、活動プログラムの更なる発展・完成及びその成果の普及を展開している。
- ④ 平成27年度からの5年間のSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定が終了し、グローバルな社会課題に関し、多面的に考え、多角的に行動する力を備えた、国際舞台で活躍する人材の育成のための本校独自の探究活動プログラムが完成し、本校普通コースにもその指導のノウハウは波及している。現在、文理融合という原点に回帰するとともに、新しい金沢泉丘SGHプログラムの開発に取り組んでいる。
- ⑤ 平成24年度に「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定を受け、人文科学、自然科学の両分野における幅広い教養を身につけ総合力を備えた、国際性に優れた次世代を担うリーダーの育成をめざしている。加えて、本県ニュースーパーハイスクールの牽引役の使命を担っている。

（2）生徒に関する中・長期的目標

- ① 「確かな学力」の育成
確かな知識に基づいた主体的・対話的で深い学びにつながる質の高い教科指導を、GIGAスクール構想を踏まえた個別最適かつ協働的な学習方法を取り入れ組織的に展開する。この実践により、生徒一人ひとりの進路実現に繋げていく。
- ② 豊かな心の育成
「心身一如」の具現化に向け、部活動・学校行事・社会奉仕活動等の教育環境・設備を整え、次世代を担うリーダーに必要な人格及び他者をおもんぱかる精神の陶冶をめざす。

（3）教職員・学校組織等の望ましい在り方

- ① 指導力の向上と組織の活性化
県民目線で教育公務員としての規範意識をしっかりと、法令を遵守する。効果的な教育活動を展開するために、研究授業や職員研修会を通して教職員の指導力を高める。また、組織運営の合理化・効率化を推し進めることにより、教職員がワーク・ライフ・バランスを維持し、活力と創造力を十分に発揮することのできる職場環境を形成する。
- ② 開かれた学校づくり
本校の方針や特色ある取組を、積極的に県民に発信し、広く協力・支援が得られる学校とする。また、PTAや地域社会とも連携することによって、本校の教育活動が有機的に展開することをめざす。

3 今年度の重点目標

創立130年の歴史と伝統を踏まえ、建学精神に基づいた教育活動の実践に努める。

- （1）「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。
 - ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。また、生徒1人1台端末を効果的に活用しGIGAスクール構想を展開するなどして、生徒の主体性を高め、学びに対して自走する力を育成することで、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。
- （2）探究活動プログラムの進化・発展及び成果の普及に努める。
 - ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させ、2つのプログラムを融合させた新しい探究活動プログラムを全校生徒に対して実践する。加えて、その指導法を本校高等学校に波及させるとともに、あまねく県民の方に発信する。
- （3）「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。
 - ・部活動・生徒会活動・学校行事等を通して、自分の考えを発信するとともに他者の考えも尊重し、集団の共通目標に向かって協働して粘り強く行動する力を育成する。また、挨拶の励行や校内美化、様々なマナーを遵守することで周囲から応援される人づくりを推進する。
- （4）「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。
 - ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。とりわけ、探究活動を通して様々な社会課題解決に向け思考し、定量的・定性的根拠をもって提案する力を育成する。
- （5）組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。
 - ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。

令和6年度 自己評価計画書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的な取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
1 「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。 ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。また、生徒1人1台端末を効果的に活用しGIGAスクール構想を展開するなどして、生徒の主体性を高め、学びに対して自走する力を育成することで、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。	<p>①授業において「本質に触れる指導」「生徒の主体性や対話力を向上させる指導」を目指す。そのために、「本質に触れる指導」や「学習における生徒の自走」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループ単位で行い、授業改善に取り組む。</p> <p>②生徒に、模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、習熟度別授業の実施や校内模試問題の研究により深い思考力の育成を進める。</p> <p>③ホーム担任を中心に、年間6回以上の個別面接指導を実施し、文理選択を含め自身の進路について考えさせる。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導により、家庭学習の定着を図る。</p> <p>④ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、自分を見つめさせ、高い進路志望の確立を図る。また、集会や希望者補習なども通して、自発的な学習を促す。</p> <p>⑤授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削指導等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた、「個に応じた指導」も展開していく。</p>	教務課 進路指導課 1学年 2学年 3学年	<p>昨年度、「本質に触れる授業」「学習における生徒の自走を促す授業」を目標に、各教職員が授業研究と実践を行った結果、昨年度12月の生徒による授業評価で、「授業が充実している」の全体平均値が3.64と高い値であった。しかし、「興味関心が持てた」の全体平均値は3.40と7月からは伸びたものの「授業が充実している」の値ほど高いとは言えなかつた。 今年度も「本質に触れる授業」と「生徒の自走を促し、主体性を高める」指導法の研究・改善を継続することで、生徒の興味関心、論理的思考力、判断力、表現力を高めたい。</p> <p>3年生の難関10大学志望者数は、2月の進路志望調査によると282名、その中で東大と京大志望者が合わせて132名と例年に比べて多い。 2年生の難関10大学志望者数も251名と、高い志望を維持している。</p> <p>生徒が新たな生活に1日も早く慣れ、学習と部活動とを両立できるような良い生活習慣、さらには基本的な学習習慣を身につけさせるべく指導を行っている。そのためにも、各面談で何を確認するのか、どういうメッセージを生徒に伝えるのかについて担任で言葉をそろえ、目線を合わせたうえで指導していく。</p> <p>1年より個人面談や学年集会等での意識づけを行い、徐々に高い進路志望を持つ生徒が増えている。3年生に向け、自走できるたくましい生徒を増やしたいと考えている。一方、中下位層の底上げも必要であり、個に応じた面談や細やかな指導を通して、自信をつけさせ、確かな学力を身につけさせたい。</p> <p>学習習慣の定着と圧倒的基礎力の育成を柱に指導してきたが、部活動との両立に悩み家庭学習の時間を確保できない生徒が見られる。また、スマートフォンの使用時間も依然として課題である。生徒一人一人の進路志望の実現に向けて、個別対応しつつさらに高い学力を身につけさせる必要がある。</p>	<p>【満足度指標】 生徒が「授業が充実している」「興味関心が持てた」と感じている。</p> <p>【成果指標】 東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満</p> <p>【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立った割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p> <p>【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立った割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p> <p>【成果指標】 難関10大学及び国公立大学医学部医学科の合格者の合計人数(重複可)が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満</p>	<p>「授業が充実している」「興味関心が持てた」の2つの質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて加えた全体平均値α、βをそれぞれ算出する。 ①「よくあてはまる」 ②「ややあてはまる」 ③「あまりあてはならない」 ④「全くあてはまらない」 α、βの値が、 A ともに3.60以上 B ともに3.50以上 C 一方のみが3.50以上 D 一方のみが3.40以上</p>	<p>C・Dの場合、授業改善に向けた取り組みの再検討を行う。</p> <p>C・Dの場合、授業や3年間を見通した進路指導について、再検討を行う。</p> <p>C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。</p> <p>C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。</p> <p>C・Dの場合、授業や補習、個人添削等の方法について、再検討を行う。</p>	<p>生徒による授業評価を実施</p> <p>年度の当初に入試反省会・検討会を実施</p> <p>生徒によるアンケート調査を実施</p> <p>生徒によるアンケート調査を実施</p> <p>次年度の当初に入試反省会・検討会を実施</p>

重点目標	具体的な取組	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
2 探究活動プログラムの進化・発展及び成果の普及に努める。 ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させ、2つのプログラムを融合させた新しい探究活動プログラムを全校生徒に対して実践する。加えて、その指導法を本県高等学校に波及させるとともに、あまねく県民の方に発信する。	①これまで取り組んできた科学的な課題研究活動を進化・発展させることで、生徒の多面的・多角的なものの見方、思考する力、行動する力など探究する力の向上を図る。また、普通科普通コースの課題研究では、SGH推進室と連携し、文理を融合させた新しい探究プログラムを確立し、その実践を図る。	SSH推進室	文科省より、SSH認定枠指定校として令和4年度から5年間の指定を受けている。SSH事業で得られた様々な成果を県内外へ展開・普及することをミッションとしている。これまでの研究開発の成果として、科学的な課題研究活動のプログラムはある程度確立されている。昨年度から始まった普通科普通コース「課題探究Ⅰ」との差別化をはかるためにも「理数探究」の深化が必要である。また、「課題探究Ⅰ」では、SGH推進室と連携しつつ、普通科普通コースにおける探究プログラムを確立させる必要がある。未来社会を見据えた多面的なものの見方の育成に取り組みたい。	【満足度指標】生徒が、探究活動を通じて「思考する力」「分析する力」「行動する力」「表現力」(いわゆる「探究力」)を身につけていく。	学校評価Hアンケートにおいて、「自分自身の探究する力、思考する力、行動する力」「思考力・分析力や表現力」が高まつたか。の設問に対して、「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合の平均が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、計画の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
	②課題研究を軸とした探究型学習プログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、グローバルリーダーに必要な種々の能力の育成を目標とし、その達成のために事業を展開する。	SGH推進室	5年間のSGH指定期間において確立した課題研究を軸とした探究型学習のためのカリキュラムを継承しながら、現在はその成果をより高度なプログラムへと発展させることを模索している。特に、SSH推進室と連携して年度末に実施する校内行事「探究の日」を学校全体の取り組みの大きなゴールの1つに位置づけ、学年や文系・理系の垣根を超えた探究学習のあり方を模索している。	【満足度指標】生徒が、「問題意識を問い合わせて組み立てる力」(思考力)、「考え方の異なる他者とも協働しながら物事を進める力」(協働力)、および「自分の考えを相手に論理的に表現する力」(表現力)を身につけていく。	『SG探究基礎』(1年)『課題探究Ⅰ』『SG探究』(2年)『課題探究Ⅱ』『SG探究活用』(3年)において、グローバルリーダーに必要な思考力、協働力、表現力を身につけているかという項目で、「よくあてはまる」「ややあてはまる」とする生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 ・部活動・生徒会活動・学校行事等を通して、自分の考えを発信するとともに他者の考えも尊重し、集団の共通目標に向かって協働して粘り強く行動する力を育成する。 また、挨拶の励行や校内美化、様々なマナーを遵守することで周囲から応援される人づくりを推進する。	①各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高めるとともに、リーダーシップを發揮し、グローバル人材としての資質を育成する。	総務課	令和5年度の「生き方講演会」は、創立130周年記念講演を兼ね、実業家のハロルド・ジョージ・メイ氏にお話をいただいた。メイ氏の経営者として企業を立て直した経験やエピソードを、ユーモアを交え情熱的に語ってください、大変好評であった。その他各講演も生徒にとって適切な時期に適切な内容のものであった。勉強や部活動などへの取り組み方を考える際の大きなヒントや視点を得ることができた貴重な講演会となった。	【満足度指標】講演会が、生徒にとって貴重な知識や経験を学び、生き方や価値観を考える良い機会となっている。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、講師の選定等を工夫する。	生徒へのアンケート調査を実施
	②基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、以下の挨拶指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・職員室等の入室マナー ・授業の開始、終了の挨拶	生徒指導課	登校時や校内(廊下等)では、自主的に挨拶をする生徒が増えてきている。しかし、来校者や地域の方々に対する挨拶については、まだ十分ではない。	【成果指標】生徒が、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている。	「私は、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	③「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	生徒指導課	年間3回実施している「生活についてのアンケート調査」や担任による個別面談を通して、生徒が抱えるトラブルを早期に発見し、対応することができた。今後もいじめ問題やネットトラブルについて、研修会等を通じて教員が理解を深め、適切な対応ができる体制を確実に作っていく。	【成果指標】互いに認め合い助け合う仲間づくりができる生徒が多い。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	④部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立(文武両道・文武不岐)をめざす。	生徒指導課	部活動加入率は高い。意欲的に活動し、有意義であると考えている生徒が多い。運動部は総体総合成績において公立高校1位である。文化部でも多くの部が上位大会に出場し、優秀な成績を収めている。	【成果指標】上位大会(グローバル大会以上)に進出する部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	県予選を通過しグローバル大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	C・Dの場合、次年度へ向け、指導方法を工夫する。	県総体・総文等の結果報告による

重点目標	具体的な取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
	<p>⑤環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ゴミの分別や節水・節電に取り組む。</p> <p>⑥読書推進活動と学習環境整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などにより、貸し出し冊数や入館者数の増加をはかる。</p> <p>⑦悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。</p>	保健環境課 図書課 教育相談室	探究活動等において学んだ、地球環境に調和した持続可能なライフスタイルについて、知識としてだけではなく、自分自身の生活の中で実践することが課題である。 情報メディアの普及による読書離れの傾向は本校生徒にも及んでいると推察されるが、普段からの読書啓発・読書推進活動はもとより、授業や教科学習と連動した読書や図書館利用の一層の充実を図ることが喫緊の課題である。 自分の進路に対する不安や学習面でのつまずき、人間関係の悩みによって、学校生活への意欲を失いかけたり、情緒が不安定になったりする生徒が見受けられる。	<p>【満足度指標】 生徒が、環境保全を意識して生活し、実践している。</p> <p>【成果指標】 1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 3,500冊以上 B 3,000冊以上 C 2,500冊以上 D 2,500冊未満</p> <p>【満足度指標】 相談室を利用した生徒が、気軽に相談でき利用しやすいと感じている。</p>	<p>校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p> <p>1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 3,500冊以上 B 3,000冊以上 C 2,500冊以上 D 2,500冊未満</p>	<p>C・Dの場合、取り組みの見直し・改善を検討する。</p> <p>C・Dの場合、取り組みの見直しと改善を検討する。</p> <p>C・Dの場合、取り組みの見直し・改善を検討する。</p>	生徒へのアンケート調査を実施 月毎の貸出数調査を実施 生徒へのアンケート調査を実施
4	<p>「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。とりわけ、探究活動を通して様々な社会課題解決に向け思考し、定量的・定性的根拠をもって提案する力を育成する。</p>	<p>①保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウイークなどを通じて積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。</p> <p>②理数科1,2年生、普通科1,2年生及び、科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実させることで、科学教育を推進する。</p> <p>③「学年だより」、「進路だより」、「学校HP」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。</p>	総務課 SSH推進室 1学年 2学年 3学年	<p>令和5年度の各行事の参加者数は「PTA総会」約1000名、「生き方講演会（保護者向けは動画配信）」約700名、「いしかわ教育ウイーク」約500名で、合計が約2,200名であった。本校に対する保護者の関心の高さをうかがうことができ、今後もより一層保護者が来校しやすく、学校を理解していただけるような行事運営に務めたい。</p> <p>毎年理数科1年生が、創立記念祭に来校した小学生等に対して理科教室を開催し、参加者から好評を得ている。また、金沢子ども科学財団と共催する金沢泉丘サイエンスグランプリやサイエンスヒルズこまつ主催のサイエンスフェスタに参加し、高校生と中学生が協働活動することで、科学教育を推進している。今後は、活動の範囲を広げていきたい。</p> <p>定期的に「学年だより」「進路だより」「学校HP」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。</p>	<p>【成果指標】 「PTA総会」、「いしかわ教育ウイーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1,500名以上 B 1,200人以上 C 900人以上 D 900人未満</p> <p>【満足度指標】 理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p> <p>【満足度指標】 学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウイーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1,500名以上 B 1,200人以上 C 900人以上 D 900人未満</p> <p>C・Dの場合、PTAと協力して広報活動に努める。</p> <p>C・Dの場合、次年度に向け、取り組みの改善を検討する。</p> <p>C・Dの場合、次年度に向け、内容の改善を検討する。</p>	PTA総会 (5/11) いしかわ教育 ウイーク (11/1~7)
5	<p>組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。</p>	①業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進める。これにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。	管理職	月に2度の定時退校日、部活動休養日、夏季休業中の学校閉院日の設定や年休の積極的な取得呼びかけ、アプリを活用したアンケート集計、会議のペーパーレス化など効率的な業務の推進によって、教職員のワーク・ライフ・バランスを考えた働き方にに対する意識が高まっている。時代の要請に応える教育活動を展開するために、採点ソフトの導入、ICTを活用した教材の共有や共同開発など効率的で密度の濃い実践を推進し、教職員の意識改革を図るとともに、時間外勤務時間の削減に努めていく。	<p>【満足度指標】 教職員が、ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>C・Dの場合、次年度に向け、内容の改善を検討する。</p> <p>C・Dの場合、教職員へのアンケート調査を実施</p>